

## 17 世紀の英国の村人たちは黒死病とどのように闘ったのか

Geraldine Brooks: *Year of Wonders*. 2008. Harper Perennial.

キーワード: Eyam Village / Black Death / pest / Daniel Defoe / John Clifford /  
David Paul / Nonconformist / Protestant Reformation / 『灰色の空のかげに』

金子輝美

### 1. はじめに

1665-1666 年という時代は英国では「疫病の年」(Plague Years)として知られている。1664 年末にオランダからブリテン島に上陸したペスト(pest)すなわち黒死病(Black Death)は、1665 年初頭からロンドンで猛威を振るい始め、未曾有の悲劇をもたらした。この感染症はやがて遠く離れたイングランド王国のイーム村(Eyam Village)へ飛び火し、翌 1666 年に終息するまでに村人の約 3 分の 2 の生命が奪われたと伝えられる。

この小説はオーストラリア出身の女性小説家・ジャーナリストであるブルックス(Geraldine Brooks)<sup>1</sup>によって史実に基づいて書かれた意欲作である。多くの人々にこの小説の存在を知ってもらえれば、評者の願いの大半は達せられる。どのような感銘を受け、どのように解釈したのか、どのような疑問を感じたのかなど、読後感を多面的に記したい。本稿は拙いながらも、敢えて書評論文の形式を採った。大方の助言と叱正を得ることができれば幸甚である。

休暇を英国で過ごしていた著者は、ジャーナリストの夫と英国中部の田舎へハイキングに出かけた。その途中、偶然にも「疫病の村」(PLAGUE VILLAGE)という道標(finger post)に突き当たった。その村を訪れてみると、牧師館があり、そこには 1665 年から 1666 年に大流行したペスト禍に対する牧師と村人たちの闘いの記録が展示されていた。だが 350 年も昔の小さな村の出来事でもあり、当時を正確に伝える歴史的資料はあまり多くは残されていないかった。

この史実に衝撃を受けた彼女は、その後、何度もこの村を訪れることになった。だが詳しい情報を採取するには、それだけでは不十分であることを知った。長期に滞在し、村人たちと生活を共にしながら、彼等の間に伝わる逸話や昔話に耳を傾ける必要を感じた。幸いにもこの村には、この史実に関心を寄せる歴史学者クリフォード(John Clifford)が住んでいた。著者ブルックスにとって、この学者と知り合えたことは大きな励みになった。彼はこの村での研究成果である“*Eyam Plague 1665-1666*”(2003)<sup>2</sup>という小冊子の論文集を発表したことで知られている。

著者ブルックスは巻末の Writing What I Know という質疑応答の欄で、“For most of 1999 I tried to live in 1666. I wanted to imagine what it was to be a young woman in a tiny England village of 250 souls in the year bubonic plague struck. The story is based on what took place in a real village

named Eyam in the Pennine mountains.”と答えている。病魔が脅威を増し、村が閉鎖された1666年という年月をこの歴史の村で生きてみたいという夢は、333年後の1999年に実現した。

アンナ(Anna Frith)という18歳の女性を主人公にして、一人称形式で語られるこの物語には、この村への郷愁にも似た著者の熱い思いが込められている。著者は、歴史・民族学・宗教・鉱業などに関する資料を渉猟し、そこから得られた史実や伝承などに基づいて、物語を多角的に構想していった。教区牧師(rector)は非常事態においてどのような言動をしたのか、牧師夫人とアンナとの個人的対話から何を読み取るべきなのか、村人たちの信仰と現実の生活感情はどのようなものだったのかなど注目すべきことは多い。

著者ブルックスは表紙の扉に桂冠詩人ドライデンから、次のように2連8行を引いている。

O let it be enough what thou had done,	神よ、お願い、これ以上は罰を与えないで！
When spotted deaths ran arm'd through every street,	黒死病は武装して街路を疾走し、毒矢を放つ
With poisoned darts, which not the good could shun,	正義を守る人もこれを防御できず、
The speedy could outfly, or valiant meet.	韋駄天も追いつけず、勇者も迎え撃てず
The living few, and frequent funerals then,	生存者は少なく、遺体は累々、弔いは続く
Proclaimed thy wrath on this forshaken place:	神の怒りが住民とその土地を見捨てたのだ
And now those few who are return'd agen	罰を免れて帰郷した人はごく僅かで、
The searching judgments to their dwellings trace.	神の裁きは家族にも及んでいた (評者試訳)

From *Annus Mirabilis*, The Year of Wonders, 1666, by John Dryden.

黒死病は武装して人間を襲う悪魔として捉えられている。ラテン語のタイトル *Annus Mirabilis* は The Year of Wonders を意味するので、ブルックスはこの小説の書名を *Year of Wonders* 『驚異の年』とした。1666年9月にはロンドンで歴史に残る大火があり、死者は少なかったが、市内の約85%の木造建築を焼き尽くした。また1665年には、第二次英蘭戦争が始まり、激しい海戦が交わされていた。まさに内憂外患、国難が集中した驚異の年月であった。この詩はこれらのすべての出来事を射程に入れて書かれた304連1216行から成る長編叙事詩である。

## 2. 宗教的時代背景

約2000年の長い伝統をもつローマ・カトリック教に連なる世界各地のカトリック教会は、多少の消長はあったけれど、現在まで絶対的な権威を誇ってきた。伝統を重んじ聖書を神の啓示と考え、ローマ教皇の言葉は神の言葉に等しいとされる。

1517年にドイツの神学者ルター(Martin Luther, 1483-1546)がカトリック教会を批判したのを機に、カトリック教会からプロテスタントが分離独立するという一連の宗教改革(Protestant

Reformation)が実現した。だが、宗教改革はこれで完全に終焉したのではなく、実質的には17世紀半ばまで続く運動であった。この改革運動の過程では、さまざまな教派が離合集散し複雑な様相を呈したが、ここでは煩雑になるのを避けてそれらの活動には触れないことにする。

その後、1642年から1649年にかけてイングランド・スコットランド・アイルランドの3王国の間でくすぶり続けていたキリスト教改革運動が内戦に発展する。スチュアート朝時代には、イングランド王国は英国国教会(Anglican or Protestant Church)による王の絶対主義によって維持されながらも、富裕層と貧困層の間の格差が大きくなり、社会は急速に変化していった。1625年にイングランドとスコットランドの王位を継承したチャールズ I 世は、この変化に即応できずに議会と対立し、1642年になって失脚し処刑された。その前年の1641年にはアイルランドでカトリック教徒が蜂起して実権を掌握した。イングランドの一部では、清教徒たちがフランスの神学者カルヴァン(Jean Calvin, 1509-1564)の影響を受けて、大規模な民衆運動を起こし次第に過激化していった。カルヴァン主義の特徴は、「聖書は精霊によって記された神の言葉、信仰と生活上の唯一の規範」「人が救われるか否かは、生まれる前から神が定めた計画によって決められている」というように説明されることが多い。前半の説明からは「厳格」という原理主義的なイメージが感じられる。後半は「二重予定説」(Double Predestination)、あるいは単に「予定説」と呼ばれる教義である。清教徒(Puritans)には、「純化する」(purify)という意味が込められている。この時期の国教会は、世俗界の国王が宗教界の最高位を兼ねたことや古いカトリック教的要素を残していたことなどが、純化の対象になった。「高校の教科書などでは、国教徒と清教徒を対立させることがあるが、清教徒は決して反体制の人たちではなかった。国教会にとっての最大の敵はやはりカトリック教会だった」(小泉 1996: 14)という指摘もある。この小説では、清教徒と国教徒の聖職者たちが、カトリック教徒をPapists、その主義をPapistryと蔑称する場面が見られる。

非国教徒(Nonconformists)とはどのような人たちなのか。彼等は1559年に国教派が「統一化法」(Act of Uniformity)を施行した際に、宣誓を拒否して国教会を離れた人たちであり、清教徒やクエーカー教徒などが含まれる。1660年の王政復古(Restoration)によって、清教徒革命(Puritan Revolution/Wars of the Three Kingdoms)は頓挫し、3王国はそれぞれ王政に復した。清教徒たちは法令によって要職から追放され、差別や迫害を受けることになった。

### 3. 梗概と感想

この小説は次のように構成されている。章や節に相当する番号は付されていないので、便宜上、章と節の区分けにそれぞれ▼と◎を用いる。

▼ Leaf-Fall, 1666 (落葉の季節, 1666年) pp. 2-19. <序章に相当する>

◎ Apple-Picking Time (リンゴ収穫の季節) pp. 3-19. 疫病が去った後、幸せだった日々を回想しながら、アンナは収穫期のリンゴ園の小径を踏みしめる。

## ▼ Spring 1665 (1665年の春) pp. 22-259. &lt;物語の中核を占める&gt;

- ◎ Ring of Roses (バラの花びら) pp. 23-46. 最初の犠牲者の首にできた腫れ物は、ぼっかり口を開け、赤紫のバラのようだった。疑いなく、ペスト(黒死病)の症状だった。
- ◎ The Thunder of His Voices (雷鳴のような神の声) pp. 47-63. 死者が増え、雷鳴のような神の怒りの声が聞こえてきた。村人たちに試練を与える神の声だった。
- ◎ Rat-Fall (ネズミの死骸) pp. 65-79. 大量のネズミの死骸とともに、ノミが拡散した。子供たちは死骸を指で吊して遊んだ。疫病との因果関係を知る者はいなかった。
- ◎ Sign of Witch (魔女の兆候) pp. 81-95. 疫病は魔女によってもたらされると信じる村人がいた。魔女狩りが始まり、罪のない女が犯人にでっち上げられた。
- ◎ Venom in the Blood (血の中の毒) pp. 97-107. 日曜日の礼拝で、ブラッドフォード大佐一家を除く村人全員が、牧師の説教に従って村に残る決意をした。
- ◎ Wide Green Prison (広い緑の牢獄) pp. 109-125. 村人たちは自分たちが選んだ広い緑の監獄とも言うべき自然の中で、神の采配に身を委ねることになった。
- ◎ So Soon to Be Dust (塵になるには早すぎる) pp. 127-135. 大佐から解雇された2人の使用人は親戚のいる村へ逃避を試みたが、沿道で病原菌扱いされ村へ戻ってきた。
- ◎ The Poppies of Lethe (レーテのケシ) pp. 137-158. 牧師夫人には過去があった。夫人が秘蔵していた麻薬をアンナは飲んでみた。経験したことのない楽しい夢をみた。
- ◎ Among Those That Go Down to the Pit (穴に潜る人たち) pp. 159-188. 数年前から村はずれに住んでいた5人家族のクェーカー教徒が娘1人を残して疫病死した。
- ◎ The Body of the Mine (鉱山協会) pp. 189-208. アンナの実父が、鉱山協会の庭で開かれた裁判で、窃盗の罪で磔(はりつけ)の刑を言い渡され、雪の原野に放置された。
- ◎ The Press of Their Ghosts (妄動する亡霊たち) pp. 209-229. 死者が増え続けた。村には流言蜚語、迷信、怪談の類いが乱れ飛んだ。亡霊たちが騒ぎ出したのだった
- ◎ A Great Burning (焼却の大焚火) pp. 231-251. 牧師は死者の衣類や私物をすべて大焚火で焼却することを要請した。だが、思い出が強く残る物品は燃やせなかった。
- ◎ Deliverance (疫病からの解放) pp. 253-259. 8月初旬、疫病は過ぎ去った。だが悲しいことに、牧師夫人が村人の凶刃に倒れて帰らぬ人になった。

## ▼ Leaf-Fall, 1666 (1666年、落葉の季節) pp. 261-294. &lt;終章の伏線となる&gt;

- ◎ Apple-Picking Time (リンゴ収穫の季節) pp. 263-294. 黒死病は過ぎ去った。独り身になった牧師とアンナは親密になる。彼女は牧師の教条的な禁欲主義の実状を知る。

## ▼ Epilogue (終章) pp. 295-310.

- ◎ The Waves, Like Ridges of Plonged Land (畑のような大海原) pp. 297-304. 赤ん坊を譲り受けたアンナは、イタリア行きの大型武装商船に乗り、アラブ人の港で下船した。
- ◎ Afterword (あとがき) pp. 307-310. 作中の牧師は実在した牧師 William Mompesson をモデルにしている。この牧師は村を封鎖する前に、2人の子供を外へ逃がしている。

小説の舞台となるダービシャー (Derbyshire) 州の山腹の村は、牧師館を中心にして、東西に帯状に延びている (Our village is a thin thread of dwellings, unspooling east and west of the church)。緩やかな坂道を少し歩くと、数本の小径へと分岐し、その先にはリンゴ園、農園、牧草地が広がり、水車が回っている。点在する農家には牛小屋や豚小屋が併設されている。春の気配が感じられるのは4月半ばを過ぎてからである。リンゴの白い花が咲き、原野はラッパ水仙の黄色で染められる。5月祭 (Maying) の頃には、垣根のサンザシ (別称メイフラワー) が白い花を付け、疎林の下にはツリガネソウの青い絨毯が広がる。牧師夫人が「エデンの園」と呼ぶ花壇には、淡青色のワスレナグサに続いて、濃紺のヒエンソウが咲き、やがて淡いピンクのゼニアオイに取って代わられる。窓辺の大きな花瓶に生けられたジャスミンとストックが芳香を放っている。春は夏へと短絡し、やがて短い秋がやってくる。山裾には鉛を採る坑道が掘られている。病院、小学校、芝居小屋などはない。「マイナーズ・タヴァン」という酒場があり、鉱夫たちだけでなく多くの村人たちの憩いの場になっていた。アンナの父親もこの店で時間を過ごすことがあった。この店の中庭では鉱山協会 (the Body of the Mine) の会合が開かれることがあった。

この村は幹線道路からも重要拠点からも遠く離れていた。小さな旅籠はあったが、旅人が宿泊する場面は描かれていない。中央では国王と議会が対立し、国王が処刑され、別の王も追放されたと思ったら、また元の地位に戻った、という大事変があった (such large matters as the execution of one king and the exile and the return of another)。だが、村人たちは外の世界をほとんど何も知らされずに育った。文字通りの僻地の寒村で、読み書きのできない村人が多かった。

アンナは、酒飲みで怠惰な父と、品性に欠ける継母 (stepmother) によって育てられた。2人の評判は必ずしもよくはなかった。実母はアンナが4歳の時、難産で次女とともに死亡している。アンナは15歳で20歳半ばの鉱夫サム・フリス (Sam Frith) の求婚を受けて結婚し、3年間で2人の男の子に恵まれた。夫の話題は狭かったが、妻と子供を愛し、愚痴を言わずに黙々と働く朴訥で頑丈な身体の大男であった。だが不幸なことに、彼は不慮の鉱山事故で急死した。

アンナは国教会の教区牧師モンペリオン (Michael Mompellion) と夫人 (Elinor Mompellion) に認められて、牧師館のお手伝い (maid) として働いていた。留守中は近所の少女にアンナの自宅で2人の子供の面倒をみてもらった。この少女はきちんとした娘で、手拔かりはなかった (a decent girl and watchful with children)。だが清教徒の娘だったので、大声で笑ったり大騒ぎするのは神の御心に反する (ungodly) と信じていた。そのために長男は彼女になつかなかった。

この物語では、アンナは聡明で闊達な女性として描かれている。牧師夫人がアンナに読み書きを教えると、短期間で習得し、牧師館の書物を読めるようになった。アンナは牧師が説教や祈祷でよく用いる美しい詩的な言葉を聞くのが好きだった。その意味は理解できなくても、洗練されたリズムミカルな響きに魅せられた。例えば、*Lily of the Valley*, *Lamb of God*, *Mystic Rose*, *Star of the Sea*, *Man of Sorrows* などは、おぼろげながら前後の文脈とともに記憶に残っていた。

18歳で2人の子供をもつ寡婦になったアンナは、経済的に苦しく、また漠然とした人恋しさを感じていた。1665年春、牧師夫妻の紹介で来訪した「旅の洋服仕立て職人」(journeyman tailor) のヴィカーズ (George Viccars) を下宿させることにした。小ざれいな身なりをした20歳代の礼儀正しい好

青年であった。彼はアンナの隣家で仕立て業を営むアレクサンダー・ハッドフィールド (Alexander Hadfield) によって臨時に雇われることになっていた。村祭りを前にして、ハッドフィールドの店は1人ではさばき切れないほどの注文を受けていた。店主は2人の男の子を抱えたメアリ (Mary) と結婚したばかりだった。

下宿人は各地を移転し、大都会で生活した経験もあったので、話題が豊富だった。生まれてから村を出たことのないアンナにとって、どの話題も新鮮に感じられた。進んで2人の子供の遊び相手になってくれたので、子供たちはすぐ彼になついた。アンナに特別仕立ての服をプレゼントするなど、過剰な気配りをするところがあった。「いい男だもの、女なら彼を好きにならない方が変よ」とある中年女性は彼を評した。初夏になって、アンナと下宿人が次第に親密になりかけた矢先、微熱のあった彼の容体が急変し帰らぬ人となった。首の赤紫色の腫れ物から悪臭とともに膿が噴出していた。間違いなく黒死病の症状であった。「すべてを燃やしてくれ」——これは彼が残した最後の言葉だった。しかし彼の言葉は誰にも届かなかった。

下宿人の死はこの村のすべての悲劇の始まりであった。秋風が立ち始めた頃、アンナの2人の子供も次々に病魔に連れ去られた。アンナが思い出すのは、親子3人揃って牧場で羊の群れの世話をした晩夏のことや、数日前、近所の子供たちとネズミの死骸を操り人形のように吊るして遊んでいた長男のことであった。楽しそうに遊ぶ子供の姿を見るのはこれが最後になった。

疫病がイーム村を襲い始めた頃、ブラッドフォード大佐 (Colonel Henry Bradford) の豪邸の晩餐会に12人が招かれたことがあった。大佐の自尊心は、牧師夫人の出席という事実によって満たされた。彼女は素封家として知られた伯爵の令嬢であり、公爵夫人になれたのにその縁談を辞退したと伝えられていた。大佐にはこのような家柄や階級への根強い憧憬があった。これはある種の劣等感の裏返しであり、尊大な態度や差別意識へとつながる心理現象でもあった。

この大佐邸で給仕として臨時に働いていたアンナは、この日の晩餐会で大皿、ボトル、デザートなどを何度もホールへ運んだ。その際に、父親に似て高慢な息子 (若主人) がロンドンでの見聞を語るのを盗み聞きした。その内容は次のように要約される。

(1) 「ロンドンでは、感染を避けるために馬車に荷物を満載して、逃げて行く人たちで大混乱です。町はずれの空き地にテントを張る人もいます。赤い十字が付けられた家には、感染者が隔離されています。そこから断末魔の悲鳴が聞こえてきます。貴族はすでに市外へ出たと聞きました。国王は宮殿 (his court) をオックスフォードへ移すという噂もあります。外へ出ようと思えば出られる人でも、ロンドンを離れないことを表明した人も確かにおります。ラディソン卿 (Lord Radison) がそうです。“模範を示す” (set an example) ことが義務だと言っているらしいですが、“模範”とは何のことですかね？ みじめな死にざまをさらすだけじゃないですか。一番逃げ足が早かったのは、内科医 (physicians) と理容外科医 (barber-surgeons) です。次に逃げ出したのは、誰だと思いますか？ この村の牧師さんと同じ英国国教会の聖職者 (Anglican ministers, such as yourself) です。そんなわけで、今やロンドンの説教壇の多くが、非国教徒 (Nonconformists) によって占められています」 (pp. 61-62)

若主人の発言は、小説家・ジャーナリストとして知られる Defoe (1722, 邦訳 2009) の記述とほとんど一致する。この邦訳によれば、医師と国教会派の聖職者の逃げ足は非常に早く、患者や信徒を放置して市外へ逃亡したことへの非難は大きかった。逃亡しなかった清教徒などの非国教会の聖職者が一時的に代役を務めたこともあったが、疫病が去って国教会の牧師が戻ってくると、清教徒たちは法的に追放中の身であったために、教壇を去らなければならなかった。国教会の牧師たちは、非国教会の牧師たちを攻撃し、法令を盾にとって彼等を追い出した。逃避しなかった非国教会の牧師たちの勇氣は高く評価されなければならないが、彼等はここぞとばかりに国教会の聖職者を弾劾したことは同罪であると記されている。

上述の Defoe (1722) は実録風に書かれているが、馬具貿易商人の「私」の日記に基づいて展開されるフィクションである。デフォー自身は 1660 年生まれであるから、ロンドンが黒死病の惨禍に巻き込まれた当時は、まだ 5、6 歳の子供であった。したがって「私」＝「デフォー」ではないが、デフォーの気持ちは「私」に色濃く投影されている。綿密に調査した数字や地名に基づいて物語が展開されている点にジャーナリストとしての彼の本领が発揮されている。

『ペスト』の主人公「私」は、妻子をもつ実兄から、新約聖書の「マタイ伝」(27 章 40 節) の「己を救え」という言葉に従って市外へ逃げるのが最良の策であると忠告された。兄の言葉によってかなり心が動き、数日間悩み抜いたが、独身の主人公はロンドンに居残って事態を観察することにした。この筋立ては事実かどうか判断できないが、このようなジャーナリスト魂と言ってもいいような強い思いがデフォーには若い頃からあったようだ。なお、宮廷はオックスフォードへ移されるという噂は、噂だけでなく、本当であることがその後しばらくして判明した(邦訳 pp. 420-423)。

若主人が熱のこもった体験談を終えると、牧師は静かに立ち上がって、大佐と若主人に温和な視線を投げかけながら、低い声で(2)のように説得を試みた。

(2) 「もし外へ逃げられる人が皆逃げていたら、疫病は国中に広がり、何千倍もの猛威を振るうことになるでしょう。勇氣をもって今いる場所で立ち向かい、それを村に封じ込めることが、神の御心に沿った行動だと思います。あなたが言われるように、ロンドンでは国教徒の牧師たちが市外へ逃げ出したということが本当なら、信仰上の兄弟たちは卑劣な人間(lesser men)です。(pp. 62-63)

国教会の聖職者の行動についての若主人の指摘に対しては、この若い牧師は事実を認め、遺憾の意を示している。理想を追求する気鋭の聖職者としての矜持と初々しさが感じられる。

やがて黒死病は村全体を席捲した。死者が急増し、日曜日の礼拝場は空席が目立つようになった。座席は決まっていたので、すぐに欠席者を知ることができた。村の重要人物は前部席を占めていた。牧師は逃げ出さずに村に留まるべき理由を繰り返して説いた。

村にはさまざまな風説・俗信・迷信の類いが乱れ飛んだ。例えば、亡霊や悪魔のささやきを信じて、呪文を唱えたり、呪文が刻印された布を患部に巻き付けたり、子供に茨の垣根をくぐらせたり、赤ん坊の尿を熱して飲んだり、多くの十字架を作って部屋に吊るしたり、患部に焼きごてを当てたり、

魔女狩りをしたり、自分の身体に過度の苦痛を与えることによって神に贖罪を訴えて加護を得ようとする狂信的な苦行者の行進<sup>3</sup>に加わるなど、奇妙な事件が続発した。

先代から受け継いだ薬草園で多くの薬草を育て、咳・発熱・胃腸・肺・血行などに有効な強壯剤を開発することに没頭する女性がいた。彼女は結婚して男に縛られたくないと公言していた。因襲に縛られることなく率直に発言する新しいタイプの女性だったので、煙たがられていたが、アンナはこの女性に親しみを感じていた。しかし皮肉なことに、有効な薬剤を開発する前に、疫病の犠牲になってしまった。牧師夫人とアンナは彼女の遺志を継ぎたいと思った。今は亡きこの薬草研究家の自宅(cottage)に入って、そこに吊されていた薬草の葉や、束ねてあった根や茎の植物名を文献で同定することから調査を始めた。牧師館から持参した薬草に関する文献の多くはラテン語かギリシャ語で書かれていたので、夫人はそれらを解説してアンナに教えた。一日の調査だけでは成果は得られなかったが、最も示唆に富む文献は、ペルシヤの医師(Musalman doctor)として知られるイブン・スィナー(one Avicenna, 980-1037)の『医学典範』(*The Canon of Medicine*)であることが判明した。この文献は18世紀まで西欧の大学で使われていた。解熱・リンパ腺・咽喉・咳・肝臓・血流などに効用のある植物名が挙げられていた。だが実際に創薬ということになると、決して容易なことではないことを思い知らされた。牧師夫人は、「この病気に罹ることは、死を意味する(... the onset of the disease spells the end of life)。だから私たちがこの田舎でしなければならないことは、有効な薬草をすべて見つけ、それらの成分を混ぜ合わせて強壯剤を製造することであると思う」と語っている。神に祈って救いを求める膨大な時間の一部を薬草の研究に費やす方が、防疫策に少しでも近づけるのではないかと2人は感じていた。

1666年3月最後の日曜日だった。教会にはこれまで見られなかった人たちも来ていた。非国教徒を自認する数家族やクェーカー教徒に加えて、前任の清教徒のスタンレー(Thomas Stanley)牧師も最後部の席を占めていた。重要な宣言をするので、村の全員に出席要請が出されていたようだ。彼等は祈祷には参加しなかったが、牧師の説教には熱心に耳を傾けた。

現任のモンペリオン牧師は登壇すると、重々しい口調で村と教会を閉鎖しなければならなくなった実情を説明した。「皆さんは必ず神のもとへ召される。神は皆さんを見捨てはしない。皆さんの自己犠牲がこの土地を神聖にするのだ(以下省略)」と牧師は語気を強めた。死を覚悟したようにも感じられる説教だった。迷いのある村人もいたが、モンペリオン牧師とスタンレー牧師が個人的に説得した結果、ブラッドフォード大佐一家を除いては、全員が自分の身にどんな災難が降りかかろうと、この村に留まる決意をした。あるいはそのような決意をさせられたと考えた方が適切かも知れない。要するに、村人たちは牧師に従うことに慣れていたのである。

病魔の勢いは衰えず、1人また1人と永遠の旅に出て行った。村のはずれの高台に住むクェーカー教徒は5人家族だったが、4人が死亡し、10歳前後の娘メリー(Merry)だけが残された。この少女はその家にそのまま1人で住んでいた。父親はスコットランドの低地で牧畜を業としていたが、一風変わった信仰(their queer faith)のために、嫌がらせを受け、追い出されてしまった。生活に困り果てた父親は、たまたま夜空に白い線を引きながら、燃えるような光を放つ雄ガモ(a great burning drake streaking its white path across the heavens)が1羽飛んでいくのを目撃した。この地



方には、雄ガモの飛んだ軌道の真下に豊かな鉛の鉱脈が眠っているという言い伝えがあった。この伝承を信じていた父親は、朝まで待てずに、未明に早速その地帯へ急行し、原野を掘り始めた。そしてついに鉛の鉱脈を発見し、その採掘権を得て、一息つくことができた。靈感と伝承を重視するクェーカー教徒らしい逸話である。クェーカー教徒は清教徒革命の流れの中で生まれたプロテスタントの一派である。霊的体験をした時に、身体が震える(quake)ことからこの名称があるが、信徒たちは自分たちを友会徒(Friends)と呼んでいる。

アンナと牧師夫人は、クェーカー教徒の娘メリー(Merry)の家を訪れた。メリーは明るくて、礼儀正しい少女だった。家庭教育がきちんとなされていたとアンナは直感した。メリーに案内させて、3人は鉛を採りにランプの明かりを頼りに立坑に降りて行った。規定以上の量を得て申請すれば、メリーに採掘権が与えられるからであった。だが慣れない3人にとって、予想通りそれは非常に危険な作業だった。やっと死を免れた彼等は、この試みを断念せざるを得なかった。

採掘権を狙っている村人は他にもいた。鉱山協会内部の議論では、よそ者であり、異教徒でもある娘にまで便宜を与える必要はないという差別的な発言もあったが、父親は非常に真面目に働く男だったという意見もあった。協議の結果、娘に権利が移されることになった。

疫病の襲来を身近に感じたブラッドフォード大佐とその家族は、日曜日の礼拝を中座して帰宅し、村外へ逃走する準備をした。18年間忠実に仕えた料理担当の中年女性、さらに配膳係の男性など、すべての使用人がこの日に解雇を言い渡されただけでなく、引っ越しの手伝いをさせられた。アンナは解雇された料理人の女性に会いに大佐邸を訪れた。ほどなくして、牧師が愛馬に乗ってやって来た。村に留まるように最後の説得をするためであった。牧師と大佐の対話には全然接点がなかった。大佐は次のように意思表示した。

- (3)「牧師さん！私は怖じ気づいてなどいませんよ。手段がある正気の人間なら、誰でもする事をしているだけです。所有するものを守らなければならないのです。自分と家族の生命を守ることの方が、他人の生命を心配するよりずっと大切です。私がすることは私が決めます。牧師さんに指図されるいわれはありませんし、私は牧師さんの行動についてあれこれ言ったことはありません。でも今朝の教会でのご説教はとても立派でした。村に居残ることを正しいと思わせた点では、聖職者としての立場上は、間違っていないと思います。彼等にはいくらかの慰めになったことでしょう。いずれにしても、彼等には選択の余地はないのですから。幸いにも、私には選択の余地があります。例えば、荷物にドライデンを詰めるか、ミルトンを詰めるかという選択です。ドライデンのテーマは野心的だが、韻律は退屈ですね、ミルトンの方がいいかも知れません。牧師さんならどうしますか？」(pp. 112-115)

最後の「ドライデンか、ミルトンか」という大佐の問いかけは牧師への揶揄であろう。ドライデンやミルトンのような実際には役に立たない文学書、すなわち聖書や祈祷書を後生大切にして、空理空論を振り回すことは、ナンセンスであるというのが真意であろう。当時を代表する清教徒の文学者であり教育者でもあったドライデンとミルトンを少しは読んだことがあることを顕示しながら、大佐は自

己の行動の正当性を主張していると解したい。大佐は牧師の伝統的権威に屈することなく、主体的に今後の人生を考えていた。大佐と息子はロンドンへ出張することが多かったが、村に滞在中は慣習に従って一家で日曜の礼拝には出席していた。

「村から逃げる」ことは、大佐にとって、競合者に勝つための積極的な行為なのである。「冷淡、非情、高慢、利己的」というような人間性に関するさまざまな批判が大佐には常に付きまとった。妻は名門の出であったが、持参金目当ての結婚だったので、次第に不仲になったと噂されていた。大佐は大都会の熾烈な実力主義の社会で生きることと、田舎で安らかな家庭生活に埋没して生きることを両立させることはできなかったのだろう。彼の傲慢さは鼻持ちならなかったが、大佐邸はこの村に雇用を創出していたことは事実である。当時は、人格に関係なく、何人もの使用人を雇い入れて、意のままに働かせることができたのである。路上で大佐の馬車を見かけると、男は脱帽し女は膝を曲げて敬意を表することが儀礼になっていた。

ブラッドフォード大佐は部下を鼓舞統率し、敵軍と勇敢に戦った知的な軍人(an intelligent soldier)であった。戦いを勝利に導いたことで軍部に高く評価された。このような経歴が彼を傲慢にしたという指摘は正鵠を得ている。一方、アンナの父親は若い頃、海軍の見習い生をしたことがあったが、鞭で打たれるなど冷遇されて長続きしなかった。大佐は、社会の底辺を這いつくばって不平不満ばかり口にするタイプの人間とは根本的に相容れなかった。国家の存亡は経済の繁栄と軍勢力次第であると彼は信じていた。

7月の最後の集会では、死者の報告はなかったし、咳をしたり、微熱を訴える人はいなかった。1年余り猛威を振るった疫病はついに去ったのだ。しかし、喜ぶべきこの日の集会で、悲劇が発生した。気の狂った中年女性が、制止する人たちともみ合っているうちに、牧師夫人をナイフで刺殺してしまったのである。この女性はアンナの継母で、悪魔の呪文を信じ、自分の身体に蛇を巻き付けたりしたことがあったので、魔女扱いされていた。

牧師の悲痛は並大抵ではなかった。長時間にわたって、黙って椅子に座ったままだった。やっと立ち上がったかと思うと部屋を歩き回った。アンナが話しかけても、無言で肩をすくめるだけだった。村の若者の慶事を報らせたときにも、反応を示さなかった。多くの生命が失われたという現実に対する責任を痛感しているからであろうか。神は最後まで奇跡を起こさなかったことを説明できないからだろうか。妻の死を神の采配として受け容れられないからなのか。彼女は思いを巡らしたが、結論は得られなかった。

アンナは気分転換に、牧師の愛馬を無断で借用し、あてもなくギャロップで走らせた。気がつくと、村境を示す石が並べられた村はずれに来ていた。馬を降りてしばらく隣村を遠望した。「同じ試練を受けながら、牧師は壊れ、私は強く柔軟になった」とアンナは感じた。しばらく休んでから、馬を教会まで走らせた。牧師はシャツ姿でドアから出てきた。驚きと怒りを交えたような大声で、「君は気でも狂ったのか」と詰問した。「牧師さんは？」と彼女は聞き返した。アンナは馬上の姿をじっと見つめられたとき、かなり破廉恥な恰好をしていることに気づいていた。スカートをペチコートの上までたくし上げ、髪はほどけて腰まで垂れ、頬は上気していた。牧師に見られてひるまなかったのは、これが初めてであった。「そうだな、本当に自分でもどうかしていたと思うよ」と言って、彼は崩れるよう

に地面に膝をつけた。アンナは妻がするかのよう、彼を両腕で抱きしめた。アンナの身体を刺すような欲求が貫き、うめき声になった (It happened then: a sharp desire of pang pierced and I was groaned. -p. 275)。

牧師の悲しみに寄り添うことで、アンナは少なくとも彼女自身の悲しみを軽減することができた。彼女は牧師のために食事を用意し、伸ばし放題だった髭を剃ってあげた。「今晚、君のベッドで寝てもいいかな」(May I lie in your bed this night?)と彼は言った。牧師とアンナの個人的な人間関係は完全に逆転していた。牧師の安らぎは、聖書の中ではなくて、手を延ばせば届く俗界にあったのだ。

「このようにしていると、奥様と一緒に寝ているように思わないですか」とアンナは牧師に訊いた。「そういう思い出はない。私は妻と寝たことはない」という意外な答えが返ってきた。「アンナ、君は知らないと思うが、妻は少女の頃、大きな罪を犯したのだ。彼女には贖罪 (expiation) が必要なのだ」と彼は付け加えた。「いいえ、知っています。奥様が話して下さいました」とアンナは正直に答えた。アンナが数か月前、夫人から聞いた話は概ね次のようなことであった。

- (4) 「牧師夫人は、資産家の伯爵の娘として大切に育てられた。学問一筋の女性家庭教師の下で、豊かな教養を身につけた。だが人生とか社会という現実的なことを学ぶ機会はなかった。公爵の跡取りの20歳の息子が彼女を追い回し始めたのは、彼女がまだ14歳の時だった。彼女も彼に夢中になり、2人は両親に内緒でロンドンへ駆け落ちした。しかし、彼女が妊娠したことを知ると、彼はすぐに去っていった。父親が最良の医師を雇ってくれたおかげで、墮胎手術は成功したが、子宮は機能を失っていた。

夫のモンペリオン牧師の父は非国教会 (議会派) の副牧師 (curate) であったが、教会よりも議会における勢力争いに注力した。最初は議会派が優勢であったが、国王が軍の手から逃れ、戦いが第二段階に入ると、敗色が濃くなった。父の自宅は国王派の進軍経路にあったので貴重品が略奪された。不幸だったのは、父が自宅の近くで、味方の兵士に誤射されて重傷を負ったことであった。家庭は困窮したので、長男のマイケル少年は牧師夫人の実家の執事 (steward) の下で、馬に蹄鉄を付けたり、仔馬の世話、畑仕事、作物の運搬、猟場の管理など、さまざまな雑用を命じられた。彼は効率的に要領よく仕事をこなした。その真面目さと聡明さが伯爵の眼に止まり、伯爵は彼に教育を受けさせることにした。少年は中等学校を抜群の成績で卒業し、オックスフォードの最高学府へ進んだ。このお屋敷の令嬢 (現在の牧師夫人) は、精神的にも肉体的にも衰弱しており、庭の椅子に座ったまま、ぼんやりと時間を過ごす毎日であった。彼との最初の出会いは、このような時だった」(pp. 150-154)

ベッドに横たわったままで牧師は話を続けた。「私は妻を助けなければならなかった。妻がまだ14歳の少女だった時の情欲が、腹に宿した新しい生命を殺す原因になった。だから、彼女は一生その情欲を捨てて過ごすことで、その罪の償いをしなければならぬ。彼女が私を愛すれば愛するほど、彼女の償いの重みはそれに比例して増していくものなのだ」

牧師は独身のカトリック教徒(Papists)の若者と同じ方法で、禁欲を続けてきたと言った。そしてその具体的方法話し始めたが、アンナはそのような話は聞きたくなかった。牧師夫人が生前ふとつぶやいた言葉をアンナは思い出した。「体力はある方だけれど、気力の方がはるかに勝っているの、夫は気力に突き動かされてしまうことがあるの。善かれ悪しかれ彼のそういうところをずっと見てきたの」という言葉の真意に、アンナはこの時になって初めて合点がいった。

疫病が去って3ヶ月経ち、リンゴの収穫期になったが凶作だった。しばらく村を離れていた大佐一家が戻ってきた。娘が日曜日の礼拝に姿を現した。アンナと話し始めると、そわそわした様子で「母が難産で心配なの」と助けを求めた。アンナは礼拝が終わるとすぐに大佐宅を訪れ、無事子供を出産させた。母は「ありがとう、ありがとう、本当に。でも今すぐここを出なさい！子供がまだ生きていることを主人と息子が知ったら、大変なことになるから」と警告した。娘は「不義の子なのよ」と付言した。生まれた子供を娘に手渡したとき、彼女の様子からアンナは何か不吉なことを直感した。アンナは間髪入れずに「この子供、私に下さい」と言った。なかなか快諾は得られなかったが、しばらく話し合った後、遠い土地へ行って赤ん坊を育て、今後一切の連絡は絶つという条件で合意した。旅費と養育費は予想以上の硬貨を用意してくれた。

アンナは今後の人生を考えた——自分の住んでいる家は、クェーカー教徒の孤児メリーに譲ろう。小さな牧場と羊の群れは、進んで世話をしてくれる人がいる。

事情を察知して、アンナ宅を訪れた牧師は、逃げるスピードが大切だからと言って、愛馬を貸してくれた。追っ手に捕えられて、赤ん坊が殺されては、すべて水泡に帰してしまう。アンナは牧師夫人との思い出が詰まった『医学典範』を急いでカバンに入れ、赤ん坊を抱えて馬に飛び乗り急発進した。遠くの港町に夕方着いた。どこへ行く船でもいいから、乗ろうと思っていた。しかしすべて出たあとだった。旅籠に泊まった。宿の主人は親切に、ヴェネチア行きの大型武装商船が、明日の早朝、出航すると教えてくれた。その船に乗った。数日経って、朝日の中で目覚めた。白壁と金色に輝く丸屋根が見えた。船長は北アフリカのアルジェリアの都市オラン(Oran)の港に着くところだと言った。アラブ人が住むこの港町は治安が悪いという理由で、船長は下船を思い止まらせようとしたが、アンナは直感的に下船を決意した。船長は親切にも、この港町に住む高名な医師を紹介してくれた。そのおかげで、その医師に面会することが許され、何人かいる彼の妻たちの1人に加えてもらった。医師はアンナが連れて行った赤ん坊に、「命の木」を意味するアニサ(Anisa)というアラビア語の名前を付けてくれた。その後、アンナはこのハーレムで医師の子供を出産し皆から祝福された。アンナはここでは『医学典範』をアラビア語で読んでいる。小説はここで終わっている。なお、モンベリオン牧師のその後は語られていない。

#### 4. 教区牧師と村人たち

アンナが少女時代に通った教会の牧師は、高齢の清教徒のスタンレーであった。彼は1662年の聖バルトロマイの日<sup>4</sup>に教区牧師の任を辞した。国教会の祈祷書(the Book of Common Prayer)

を使えという本部からの通達に彼の良心は従うことができなかったからである。国教会では聖書に依拠した既定の祈祷書を必ず使うことになっていた。一方、清教徒は自発的に祈祷書を作成することが普通であった。彼は事実上、解任されたのだった。

アンナの記憶によれば、スタンレー牧師が着任してから、安息日は廃止され、ドレスにレースを付けなくなり、メイポールの飾りは異教徒のものであるという理由で簡素化され、酒場にエールが置かれなくなり、教会の鐘は鳴らされず、公道で大笑いするのは不可とされた。スタンレー牧師は人々の心に残存するカトリック的な教条(Papistry lingering within our hearts)を批判することがあった。彼が辞任した後は、2年間住み込みの教区牧師はいなかった。アンナはまだ12歳前後の少女であったが、スタンレー牧師の辞任に直面したとき、「誰とどのように祈るのかという問題(the matter of how and with whom we prayed)」の存在に初めて気がついた。清教徒はかつてこの村を支配していたが、やがて歴史の後景へと追いやられ消えていく運命にあったのだ(The Puritans, who are few amongst us now, had the running of this village then. -p.7)。彼女は期せずして歴史の証人として、時代の転換期に立ち会うことができたのであった。

1664年、中央から派遣されたモンペリオン牧師は28歳であった。アンナは若い牧師にすぐに順応していった。多くの村人たちは中央の政界や宗教界の動向には無関心であった。村人にとって、信仰とは、日曜日に教会へ行って説教を聴き、世間話を楽しむことであって、聖書を深く勉強して議論を交わすことではなかった。「俺たち、あんな若い牧師に説教されなあかんのかよ？」と冗談交じりに陰口をつく中高年の村人もいた。村人の印象に残ったことは、牧師は非常に若く、夫人は美人であり、立派な雄馬(stallion)に乗ってやってきたということだけだった。

老齢のスタンレー牧師は辞職後、村外に転居するが、妻に死なれ孤独で不便な生活を強いられていた。非国教徒の厚意でこの村に戻り、ある家族の別棟でひっそりと暮らしていた。モンペリオン牧師もスタンレー牧師のことを気遣っていた。当時のロンドンでは、国教徒と非国教徒が激しく糾弾し合うことが多かった。反ローマ・カトリック教会という共通意識が両派を結びつけることはなかった。だがこの村の2人は決して陰悪な仲ではなかった。若いモンペリオン牧師が純粋に求めた教義の原点は、清教徒の教義と重なる部分があったからではないのだろうか。例えば「神の采配」の解釈では、両者に大きな違いはない。モンペリオン牧師の父親は非国教会の副牧師であったが、ロンドンで政治運動に参加して辛酸を舐め、不遇な一生を送ったことも、彼に何らかの影響を与えているのかも知れない。新進気鋭のモンペリオン牧師には、信仰の枠を超えた本来的な人間性が備わっていたと解釈しておきたい。

すでに第3章「梗概と感想」で述べたように、1666年3月最後の日曜日の牧師の説教は、村人の将来を運命づけるものであった。ここでは説教の内容をもう少し掘り下げて検討してみたい。説教の冒頭で、「友のために身を投げ出し、犠牲になることほど、大きな愛はない」と述べ、「同じ愛の形で、神の愛に報いるべきである」、そして「それが神の求めることであるならば、なおさらのことだ」と決論づけた。説教は流麗な声調に乗って次のように続けられた。

(5)「神は英知と大きな愛をもって、この州のすべての村から私たちの村を選び出され、試練を

与えて下さった。私たちはこの贈り物(gift)を受け容れるしかない。これは黄金の詰まった箱(a casket of gold)である。皆さんは、神が愛からではなくて怒りから(not in love, but in rage)、私たちに苦しみを与えたと思うかも知れない。だが神は私たちへの愛からこの機会を与えて下さったのだ。神は苦難を与えて私たちを試しておられるのだ(It is a trial for us, ...)。村の外に親戚や親しい人がいて、今すぐにそこへ逃げることができる人もいだろう。しかし、住み慣れたこの地を離れてはならない。神の御名において(in God's Holy Name)、十字架を背負わなければならない。村外の人たちに、疫病の種を運んで感染させたとしたら、どのようにしてその償いをするというのか(But how would we repay the kindness of those who received us, if we carried the seeds of the Plague to them?)。預言者イザヤ(Prophet Isaiah)の言葉を思い出してほしい。＜本来の自分に戻って、心が穏やかであれば救われる。迷わずに信頼すれば、力が与えられる＞という言葉。今回が歴史上最初の疫病の襲来ではない。あの強大なエジプト王国が滅びたのは、ファラオ(Pharaoh)が神に逆らったからではなかったのか？夜陰に紛れて(In the shade of night)病魔が忍びこみ、この村で最初に子供が奪われたのは、神の慈悲(His mercy)ではなくて、神の仕返し(vengeance)だと考える方が容易であろう。しかし、神は激怒されて(in anger)、この疫病を私たちに与えたと私は思わない。神が私たちに罰を与えたのは、私たちが罪を犯したからではない」(p. 102-103)

要約すれば、「神を信じれば救われる。神は激怒して苦しみを与えたのではない。疫病を神の贈り物として受け容れよう。外へ逃げて、そこの人々を感染させてはならない」ということである。

村で最初に2人の子供を失ったアンナには、声を落として「夜陰に紛れて、病魔が子供を連れ去った」と語りかけている。アンナの悲劇は、神の報復でも怒りでもなく、神の慈悲による試練であるという件(くだり)をアンナはどのような気持ちで聴いたのだろうか。Who would not fear it?という修辞疑問は、疫病を怖れない人はいないことを強調している。だが、疫病は神が与えてくれた贈り物であるから、神の愛を信じて怖れずに受け容れなければならないのだ。

(5)では対比表現が援用されている。例えば in love(mercy)と in anger(rage)、His mercy と His vengeance のような反意語を対置させて、その違いを際立たせている。また、強意表現の単純な形式としては、反復表現が挙げられる。同じ語句が数回繰り返されている。原文を示そう。

(6) The voice eased now, and soothed: ‘Stay here, in the place that you know, and in the place where you are known. Stay here, upon that piece of Earth where golden grain and gleaming ore has ever nourished you. Stay here, and here we will be for one another. Stay here, and the Lord's love will be here for us. Stay here, my dearest friends. And I promise you this: while I am spared no one in this village will face their death alone.’ (p. 106) (underlines mine)

村と教会を閉鎖することを宣言した牧師は、下線で示したように Stay here を何度も繰り返して説教を閉じている。大声で連呼するのではなくて、村人のいら立ちや不安を和らげるために静かな口調

で語りかけている。1-2行目では、in the place that you knowという能動的立場とin the place where you are knownという受動的立場が示されている。この授受の姿勢が相補されることによって、村人は「村人」に成り得るのである。お互いに寄り添い助け合えば、決して孤独にはならないし、必ず神の加護があることを説いている。

比喩表現の特徴を見てみよう。病魔の猛攻が止まない現状に接して、牧師は神の御心を察することはできないが、愛と優しさで村人に試練を与えていることを強調する。

(7)「わずかここ数ヶ月の間に、神は特に厳しく私たちに試練を与え始めた。皆さんはこの試練に勇敢に(with courage)立ち向かった。その努力は必ず報われるだろう。この試練がこれまでのように長く厳しく続かないことを私は強く望んでいる。しかし、神の御心を誰が読み取ることができようか？ 神の大きな構想(design)の複雑さ(intricacy)を誰が理解することができようか？ なぜなら神の心は微妙(subtle)であるからだ。神は意図されることを常に明確にお示しになるとは限らない。その意図されるところはもっと不明瞭(more dark)であるから、私たちは神のご尊顔を読み解かなければならない(... we must seek His face)。神の大きな愛と優しさ(tenderness)を見失ってはならない。

子供を愛する親なら、苦しみを与えることは、子供を氣遣っていることを示す手段になり得るのである。怠惰な父親ならいざ知らず、普通の親ならば、時には自分の子供に何らかの厳しい懲罰とか懲らしめを科すことをいとわないだろう。もし賢明な父親であるならば、子供の成長を期待しながら、怒りだけをあらわにするのではなくて、眼に慈愛をこめて、罰という適切な手段を講ずるだろう」(p. 168)

神の御心は誰にも解らないということは、病魔の攻撃がいつ終わるのか解からないということに他ならない。「しかし神を信じなさい。なぜならば神は私たちに苦しみを与えるばかりであるように思えるかも知れないが、神は私たちが察知できない大きな愛と優しさで、苦しみを与えて下さっているのだから」と牧師は表現を変えて同じ主旨を繰り返す。

牧師はここでは、(a)「神は私たちに大きな愛とやさしさで試練を与えて下さっている」という結論に対して、(b)「賢明な親は子供を愛するが故に懲罰を与えるが、子供にはその真意が解らない」という現実社会の身近な例を対比させている。このような親と子の関係は、現実にあり得ることなので、否定することはできない。だが、神と人の関係は、親と子の関係と果たして同じなのだろうか？ (a)と(b)は表現形式が似ているから、意味も(b)→(a)であると感じられるかも知れない。牧師の説教という文脈の中で、「神と親の共通点は何か」と問われれば、「神も親も愛をもって信徒や子供に懲らしめを与える」と答えることができる。＜なぞなぞ＞式に組み変えれば、「神とかけて何と解く」→「親と解く」→「心は神も親も愛をもって人や子供を懲らしめる」となるだろう。だが論理的には、(b)という命題を用いて(a)の真実性を実証することはできない。(a)は心の中の世界のことであるから、真実であるかないかについては、どちらであるとも言えない。しかし、限りなく(b)=(a)であるかのように「感じさせる」ためには、極めて効果的な比喩表現である。一種の印象操作の技法であるということ

もできよう。

神は容赦なく村人に苦しみを与え続ける。牧師は「神は御心を誰にも事前にお示しになることはない」と説くが、なぜ事前を示すことがないのかを問い直すことはしない。すべて神の采配であるということは、事後説明すなわち結果論であるということになる。当時は世界各地で、地震・嵐・火山・雷・日蝕・月蝕・彗星・流星(火球)・虹・オーロラ・人魂(ひとだま)など人々を惑わせる事象が発生したことだろう。神の采配とか崇りとして説明する以外にどんな方法があったというのだろうか。黒死病も謎に包まれた奇病であることに変わりはない。

牧師夫人とアンナが、遺族を訪ねた帰り道に交わした話題は、「同じ家に住んでいても、疫病に感染する人とならない人がいるのはなぜなのか」という素朴な疑問であった。村の閉鎖が宣言された日に、個人的見解を求められた謹厳なスタンレー牧師は、「その現象は偶然のように思えるかも知れませんが、すべて神の采配によるものです(... the choice seemed random to us because it rested entirely with God.)」と答えたという。「私たちは神の采配を全く予測できないのだから、神による選択の結果である人の生死は偶然のように見えるだけのことであり」と解釈される。前任のスタンレー牧師のこの説明は、まさにカルヴァン主義の予定説である。

モンペリオン牧師の説教(5)に再び注意を向けてみよう。「神は英知と大きな愛をもってこの州にあるすべての村から私たちの村を選び出し、疫病という試練を与えて下さった(Yet God in His infinite and unknowable wisdom has singled us out, alone amongst all the villages in our shire, to receive this Plague.)」(underline mine)と説いている。神は村人たちを「選び出した」(has singled us out)のである。このことは偶然のように思えるかも知れないが、神によって決められていたと解釈していいだろう。疫病は神の手に握られているのである。

このように神によって私たちの寿命も人生もすべてのことが生前から決められているとしたら、私たちはどのように生きればいいのかという疑念が湧いてくるだろう。評者のように単純に考える人間は、運命は生前からすでに決まっているとしたり、「いくら努力しても無駄である」と感じてしまう。小泉(2018: 31-33)によれば、カルヴァンの予定説の特徴は、全知全能の神によって、生命も職業もすべてのものが人に与えられていると考えることである。神と人は主従関係または上下関係にあるので、人には意思も自由も認められないし、努力によって自分の人生を変えることもできない。「あらゆる職業生活を<召命>とみなし、それに励むことだけが、救済への不確かな道である」と結論づけている。「不確かな道」と表現されているのは、救済されるための確実な方法はないということである。もし確実な方法があるとすれば、それはカトリック教の「積善説」に戻ってしまう。この世で善行を積みば救われるという教えはよく知られているが、この頃には教会へ金銭を寄付することも積善であると考えられるようになっていた。なお、予定説を全面的に容認したのは、清教徒などプロテスタントに属する数派だけであった。

スタンレー牧師の現職時に、薬草を扱う女性は魔女に違いないと騒ぎ立てる事件があった。牧師は数人の村人の行為を精査し厳罰に処した。その一方で、薬草に効用があるかのような話を世間に広めたことは神の御心に反することであると断じて、この女性を戒めたことがあった。

アンナからこの実話を聞いた夫人は「そうでしょうね(I know it)、スタンレー牧師は、死後、私たち



が拷問を受けないように、神は現世で試練を与えると信じているらしいが、私にはそのようには思えないわ」と返答し、「夫は説教でそのようなことを話すのを最近はやめている、村人たちの気持ちを高揚させ決意を強くすることが大切だと解ったらしいから(Mr. Mompellion has ceased to speak on such matters in his sermons. He understands now only to uplift our spirits and strengthen our resolve. -p. 232)」と説明している。困難な状況の中で現実重視の路線へと傾斜していく牧師の微妙な変化に夫人は気づいていたのである。

死者が日ごとに増え、地上にいる人よりも、地下に埋められた人の数の方が多くなった。村では、亡霊や悪魔の存在や、悪魔の託宣を信じる人がいた。赤ん坊の尿を鍋で熱して飲もうとしていた母親を見て、アンナはそれがいかに無意味なことであるか力説した。しかし、母親は聞き入れずに、「そのようにすれば、疫病にはかからない(this would keep off the Plague ... (p. 213))」という悪魔のお告げがあったことをアンナに伝えた。その後しばらく経ってから、この悪魔の言葉と母親の行為を考えていると、偶然、ある疑問がアンナの心に浮かんだ。

- (8) 「牧師も村人も、なぜ疫病を目に見えない敵のせいにするのだろうか。一方が神による信仰心の踏絵(a test of faith by God)であり、もう一方が悪魔のよからぬ仕業(the evil working of the Devil)と見なされるのはなぜだろうか。疫病は本当に神から与えられた試練なのだろうか？ 疫病が悪魔の仕業であると信じることと、どのような違いがあるのだろうか？ 信仰として受け入れられることと、迷信として嘲笑されることの間にはどのような違いがあるのだろうか。ひょっとしたら、どちらも同じように間違っているのではないのか？ 疫病は神によって与えられた贈物でもないし、悪魔の仕業でもなく、単に自然の中で発生する事柄のひとつではないのだろうか？」(pp. 214-215)

この独白は、客観的な立場から信仰への疑問を呈している。神を信じることも、悪魔のささやきを信じることも、同じ精神的行為であり、広い意味では信仰である。神と悪魔、すなわち両者の存在を全然信じない人から見れば、どちらの行為も同じレベルの問題である。悪魔を信じることは狭い個人的な世界における精神的行為である。一方、この村の教会で神を信じて祈りを捧げることは、世界各地のプロテスタント教会へと連なる大きな教団の一員として、他の信者たちと信仰上の価値観を共有して生きることである。両者の違いは、世界のどれくらい多くの人々から支持され、認められているのかという点にある。しかし、そのことがどのような意味をもつのだろうか。なぜ神を信じなければならぬのかということは全く別の問題である。

このような疑念をアンナは心の奥深くに内向させて悶々としていたわけではない。あくまで直感的な疑問であり、キリスト教の権威に公然と反旗を掲げたわけでもない。アンナの心は常に明るく柔軟で、あらゆる環境に順応して生きていくことができたのである。すでに触れたように彼女は聡明であったが、闊達で現実的であった。一方、それなりに年齢を重ね、世界の人々の心の世界を観察してきた著者のブルックスは、アンナの名を借りて、神とは何かという本質的な問いかけをしているように思われる。神は信者の心の中に存在するだけであって、外界に存在するわけではない。当

然のことだが、疫病は神が与えた試練でもないし、悪魔の仕業でもない。疫病はなぜ発生するのかは説明できないが、それは単なる自然現象であるという考えを著者はアンナに是非ともここで語らせたかったに違いない。

## 5. 史実と虚構と

ある女性は教会で心をこめて夫の快復を祈ったが、願いは叶いそうになかった。ちょうどその時に悪魔のささやきが聞こえてきた。悪魔は善意の仮面を被ってそっとささやくのである。藁をも掴む思いで高価な呪文札を買ってみたが、全然効き目はなかった (... costly Abracadabra spell had not saved her husband.)。呪文の具体例を示しておこう。

ABRACADABRA	A B R A C A D A B R A
BRACADABR	A B R A C A D A B R
RACADAB	A B R A C A D A B
ACADA	A B R A C A D A
CAD	A B R A C A D
A	A B R A C A
	A B R A C
	A B R A
	A B R
(左掲:本書 p.145)	A B
(右掲:デフォー邦訳 p.67)	A

神秘性を感じさせるように文字が配列されている。表意文字の漢字を配列すれば、もっと意味深長で謎めいた呪文を作れるのではないか。呪文にはそんな妄想を抱かせる怪しい魔力がある。印字された紙を身に着けて、最上段の文字列「アブラカダブラ」を繰り返すと疫病に罹らないという。恐怖の極限状態に追い込まれると、人間は冷静な判断力を失ってしまう。頼ることができる絶対的な支柱を求め、自分に都合がいいように考え、安易な方向へ流れるものなのだ。

この村にはどのような刑罰があったのか。「晒台(stock/pillory)の刑」(「矯正法」とも呼ばれた)では、罪人が晒台に立たされて見物人の罵詈雑言を浴びたり、石や果物を投げられたりした。まさに公認のいじめの場になっていた。残酷な「磔刑(たけけい)/磔(はりつけ)の刑」は、廃止される方向にあったと語られているが、実際にアンナの父親に科されている。彼は雪の荒野に立てられた柱に縄で縛りつけられ、手のひらにナイフが突き刺された状態で放置された。この地方の慣習では、ほどなくして親戚縁者などが現場に来て、解放することが暗黙裡に認められていた。アンナは継母が助けに行くものとはばかり思っていた。だが、継母の4人の子供のうち3人にその日、黒死病の症

状が出たという理由で、彼女はそこへ行かなかった。「あんたが父を見殺しにしたのよ (You left him there to die!)」と継母に言われたことは心外だった。継母に父を助ける気がないのならば、どんな犠牲をはらってでも、必ず父を助けに行ったのにと、アンナはいくら悔やんでも悔やみきれない気持ちに苛まれた。

著者が長期滞留して採取したと思われる興味深い伝承を紹介したい。疫病が去ったことが明らかになった日の翌朝、雌鶏が産んだ卵を探しにアンナが草むらへ入っていきこうとしたとき、1羽の見知らぬ雄鶏が雌鶏の群れの中で楽しそうに遊んでいるのを見かけた。追い返そうとすると、雄鶏は彼女の方へ近づいてきた。彼女は「おんどり君、どこから来たの。あっそうか、メリックさんのところから来たのね!」と話しかけた。メリックは感染するのを避けて、アンナ宅から少し離れた高台の小屋へ移住していた。疫病が去ったことを感知した雄鶏 (the prescient cockerel who knew when it was safe to come home) が元の住居の近くまで降りて来たと信じたアンナが鶏の超能力の具体例として周囲の人たちに話したことが、現在まで語り継がれてきたのであろう。しかし、鶏には疫病の襲来や終息を感知する能力はないと断言したい。元の住居へ帰る決意をした飼い主が、朝から荷物を持って、旧宅との間を往復したことなど、何らかの理由があったに違いない。この種の伝承は長年の間にいかにも本当であるかのように都合よく増幅されるものなのだ。

ペスト菌はネズミとノミを媒介して人に感染すると現在では説明されることが多い。この作品にも「高く積まれた薪の中にネズミ (rat) の死骸がいっぱいあるらしい (The woodpile is full of them, seemingly. All dead, thanks be for small mercies. -p. 72)」と村人が指摘する場面がある。アンナの長男は死んだネズミ (rat) を操り人形のように吊るして近隣の子供たちと楽しそうに遊んでいた。初秋の曇り空が湿気を運んでくると、アンナの家にもノミが現われ、好んで子供の柔らかい肌に集まった。アンナの子供トム (Tom) とジャミー (Jamie) は病魔の餌食になり、ほどなくしてヴィカーズが働いていた隣家の洋服仕立て店の子供ジョナサン (Jonathan) とエドワード (Edward) に次いで、主人のハッドフィールド (Hadfield) も病魔の犠牲になった。

ペスト菌の発生源は、初夏に死亡した旅の洋服仕立て人であることは間違いない。その後の感染経路はどのように解釈されるべきなのか。ネズミやノミが媒介したのであれば、「ネズミ→ノミ→人」あるいは「人→ネズミ→ノミ→人」という経路を想定しなければならないし、もしそうでないのならば、「人→人」という空気感染であったことになる。春にアンナの自宅で2人の子供に侵入し潜伏していたペスト菌が数か月後の9月に顕在化したと評者は直感的に解釈していた。しかしその後、ペスト菌は3ヶ月間も体内に潜伏できるのかという疑問が湧いてきた。著者はアンナ宅の下宿人の死と彼女の2人の子供の死をどのように関連づけているのか不明確である。いずれであったにしても、当時は村人たちにあまり知られていなかったネズミやノミという媒介者の存在を強調したかったのだろう。

話題を変えよう。この物語の「あとがき」 (Epilogue, p. 309) に次のような記述があるので紹介しておきたい。教区牧師の Michael Mompellion という名は実在した牧師 William Mompesson に擬して付けられた。この牧師には妻 Catherine との間に2人の子供がいたが、村を封鎖する前に子供を村外に逃避させている。妻は村に残って村人たちのために尽くしたが、疫病の犠牲になった。牧師の

手紙の1通に「彼女が元気でいてくれなかったら、私は困ったことになっただろう(My maid continued in health, which was a blessing, for had she quailed, I should have been ill set ...)」と書かれている。文体も綴り字も当時の様式ではないが、これは著者が一般読者のために現代英語風に変えたのだろう。アンナに相当する助手が牧師館にいたことは事実である。著者は実在した牧師のネガティブな側面は捨象し、性格や行動の好ましい側面だけ(only in the admirable aspects of his characters and deeds)を意図的にこの物語に採り入れたと語っている。物語の構成上、このような手法の必要性は当然認められるべきである。

1年間に及んだ黒死病の襲撃は村の道路まで変貌させた。人馬の往来が激減した生活道路にはわずかな中央部を除いて雑草が高く生い茂り、道路に落ちたクルミ(walnut)の実が発芽して1ヤードの高さまで成長していた。「村人たちは何百年も昔から自然を押しつけてきたのだ(For hundreds of years, the people of this village pushed Nature from its precincts. -p. 11)」と著者はアンナに感慨深く語らせている。著者は自然との共生を志向する現代人であるからこそ、このような視点に立てるのだろう。しかし、このような自然の逞しい復元力を、自然と人間との激しいせめぎ合いの象徴であるとアンナが認識することができたかどうかは疑問である。

史実から離れた誇張や主観は歴史小説に彩りを添える。登場人物への感情移入がなければ、読者の側にも感激や共感が生じない。この小説では、登場人物を通して著者の気持ちを素直に理解できる部分が多い。しかし終結部には何か異質なものを感ずるのは評者だけであろうか。

ブラッドフォード大佐邸で、アンナが助産をして、不義の子供が生まれたとき、子供への殺意を感じて、「この子、私に下さい」と言って、子供をもらい受ける場面は非現実的である。この衝動的な願いが実現したために、この後の物語をアンナに都合よく展開させなければならなくなった。あるいはそうでなくて、著者は最初からアンナをアルジェリアの港湾都市オランで下船させることを決めていたのだろうか。いずれにしても、著者の意図は、モンペリオン牧師に象徴されるようなキリスト教の不自然な禁欲主義と、一夫多妻制が公然と認められていた当時のアラブ人のイスラーム教の世界を対比させて、その違いを鮮明に印象づけることにあったのだろう。アンナはハーレムで宗教について医師と話し合ったと記されているが、どのような妥協点や解決法に達することができたのかをもう少し詳しく知りたいところである。著者は中東地区・北アフリカ・バルカン地方を記者として取材した経験があり、この地方の住民や社会事情に精通している。中東地区のアラブ人女性についてのノンフィクションの著書があることから判断しても、彼女はこの地域の人々に親近感をもっていたことであろう。さらに米国人と結婚して、ユダヤ教に改宗しているという事実は彼女にどのような宗教観をもたらしたのだろうか。この終結部分を明瞭に理解するのは困難である。あるいは、ひょっとしたら、この部分は余剰的あるいは番外編ともいえるべき位置を占めており、それほど真剣に追求する必要はないのかも知れない。

著者はアンナを村の外へ出したいと思っているようである。そのためには、いくつかの現実的な手段があるように思われる。例えば、村へ視察に来た役人とかジャーナリストの紹介で遠方の孤児院で働くとか、社会改革運動に身を投じるとか、ジャーナリストとか政治家を志すとか、薬草研究家入門するというような現実的な結末の方が、読者に強い共感を与えることができると思う。この種

の小説では、「史実よりも奇」にするために、破天荒な筋立てにする必要はないだろう。実直な努力によって徐々に苦境から抜け出し、人種と宗教の枠を超えて、さまざまな環境に順応する広い心をもったアンナが自己を確立していく姿を見たかった。

この小説は史実に基づいて書かれたと著者ブルックスは明言している。実際にはどの程度まで史実に沿って書かれているのかを知りたいと思う読者もいることだろう。だがそれを正確に知ることは容易ではない。史実そのものが不明確であり、両者の線引きは困難であるからだ。

イーム村のペスト禍を題材にした David Paul (2012) の *Eyam: Plague Village* という小説を紹介したい。年代順に提示される往復書簡・報告書・日記などで構成される特異な小説である。These are chronological order in which they occurred. The diaries are fictional accounts as such, but letters and other official documents are recorded as they appear in extant record. と緒言に注記されているように、手紙やその他の公文書は実在する資料であるという。一見実録風であるが、綴り字も文体も現代英語で書かれている。牧師夫人の従妹 Beth は架空の人物 (fictional character) である。Beth と牧師夫人との数通の長い往復書簡には、当時の情勢や感情が細やかに綴られている。著者の創作であるが、真実であるかのように感じられる部分もある。特に Mary という女性の存在に評者の興味は集中した。興味深く感じた事項を私見とともに箇条書きにしておきたい。この作品では本名が使われているので、(a)-(f) ではそれに従った。

- (a) Mompesson 牧師の 1665 年 9 月 6 日付けの報告書 (journal) には、I visited the home of Mrs Mary Hatfield earlier today. I had been informed that her lodger, a certain Mr George Viccars, had died of a fever. と書かれている。ロンドンから託送されてきた荷物を最初に開けたのは Viccars であった。雨で湿気を帯びた布地の中にノミが潜っており、ノミに刺されて発症したという。Defoe の小説 (1722, 邦訳 p. 369) にも、ロンドンにおける最初の犠牲者に関して同じような記述が見られる。オランダから輸入した絹の入った梱 (こうり) を開けるとその中にノミが潜っていた。すべての悲劇はこの商人の行為から始まったのである。

Viccars は妻帯者であったが、繁忙期の地域に移動して働くことがあった。牧師が弔問した時、Mary の夫は仕事で不在だった (... her husband, Alexander, was away from the family home on business ...)。Alexander Hatfield も Viccars と同じように「旅の仕立て職人」であったが、独立して営業を始めていた (Paul の小説では Hatfield、Brooks では Hadfield と綴られている)。最後の犠牲者は、死者一覧表 (pp. 114-123) によれば、1666 年 11 月に 1 人記録されている。黒死病はこの時期まで続き、やがて終息に向かったと思われる。

- (b) 牧師夫人 Catherine の従妹 Beth は、手記 (1665 年 9 月 12 日付け、p. 31) に次のように書いている。Apparently Mary Cooper, as she had been known until her recent marriage, was the widow of a lead miner to whom she had two sons, Jonathan and Edward ... / Catherine told me that in March of this year Mary remarried a travelling tailor, Mr Alexander Hatfield. Mary に関するこの記述は、かなり史実あるいは通説に近いのではないだろうか。
- (c) 牧師夫人 Catherine は 1666 年 8 月 25 日に疫病で死亡した。彼女の出身と容貌について

は、Catherine Carr, was the daughter of Ralph Carr Esq., of Cocken in the county of Durham. She was a beautiful young lady, and ‘possessed good parts, with exquisitely tender feeling’. と記されている。父親はknightに次ぐ紳士階級 esq. (esquire)であった。

- (d) 黒死病の襲来と同時に村から遁走した名士や富裕層の人々は何人もいた(... the squires and some of the wealthier villagers within the parish had already fled. -p. 125)。
- (e) Mompesson 牧師は、1669年にこの教区からNottinghamshireのNewark近くのEakringの教区牧師に転じ、同じ地区で38年間奉職した。1670年に再婚し、4人の子供に恵まれたが、2人の男の子は夭折した。
- (f) Mompesson 牧師は1708年3月7日に70歳で没した。一方、Stanley 牧師は1670年の8月24日にイーム村で80歳の生涯を閉じた。黒死病が去って約200年後、1868年から1869年にかけて、両牧師の業績を讃える機運が高まり、イーム村に記念碑が建てられた。

上掲(a)が史実であるとする、Brooksの*Year of Wonders*で1665年初夏に「旅の洋服仕立て職人」のViccarsが死亡した時期などは、正確に描かれているわけではないことになる。しかし、彼がペストの最初の感染者であり死亡者であることは事実である。

(b)で述べられているMaryという女性はAnnaを彷彿させる。2人の幼い子供を抱えたまま夫の鉱夫Cooperを不慮の事故で失い、その後、洋服仕立て業者Alexanderと再婚するが、2人の子供と夫を黒死病で失い、再び独身になったという度重なる不幸は、複雑に仕組まれた虚構であるようにも思われるが、全面否定することはできない。Alexanderもかつては「旅の洋服仕立て職人」であったというPaulの記述は、Brooksの小説の人物関係をますます複雑で紛らわしくさせる。牧師館で助手を務める女性も実際にはMaryであったような気がする。AnnaとMaryには確かに類似する部分が多すぎる。結局、2人は同一人物ではないのか。しかしながら、Brooksは作中ではAnnaとMaryという同年代の2人の女性を分離し併存させている。

ブルックスの小説には、Annaが‘Mary Hadfield!’と魔女探しに参加したMaryに大声で注意を促すシーンがある。AnnaとMaryは普段からかなり親しい隣人である。それにしても、同じような境遇を経た2人がお互いに隣に住んでいるという設定は、虚構であるにしても、少し奇妙に感じられる。実在したと思われるMaryに関する詳細な情報は当然のことながら極めて乏しいと思われる。このような実在の人物を想像だけで大幅に脚色して描くよりも、最初から架空の人物としてAnnaを設定し、自由自在に活躍させる方が無難である。実在の人物を根拠なしに歪曲したり敷衍して伝えることは望ましくない。Annaが愛する男の求婚を受諾する場面は、小説では、... strong Sam Frith grabbing me around the waist and lifted me into the low, curved branch of a gnarly, old tree. I was just fifteen. ‘Marry me,’ he said. (p. 7)と描写されている。女性としての誇りと喜びが、回想の中で架空の人物であるAnnaによって生き生きと描き出されている。しかし、史実を重視した小説であると著者が宣言しているのだから、Maryの存在を無視するわけにはいかない。MaryとAnnaは著者の心の奥底では感覚的に未分化であり、二重写しにされたままで、物語は展開されているように思われる。虚と実が混然一体となっているが、読者が通常見ることができるのは「虚」の部分である。

両者が反転することはない。これは歴史書ではなくて文学作品であるからだ。

ブルックスの小説には他にも物語上の設定と思われる部分が散見される。例えば、彼の作中のモンペリオン牧師は少年時代に伯爵の邸宅で働いたことはない。牧師の父親は国教徒の牧師であり、議会派の政治活動に参加したことはない。牧師夫人とアンナが孤児メリーに案内させて立坑を降りていくシーンは成熟した大人社会の現実の話ではなく、甘い夢物語のような感じがする。牧師夫人の少女時代の話や牧師の禁欲生活はいかにも小説らしい。当然のことだが、すでに述べたように、小説では史実を脚色あるいは潤色することは必要である。不適切に思われる虚構もあるが、ブルックスのこの作品では読者に新鮮な興味を抱かせるために、虚構が巧妙に援用されている。著者の果てしなく広がる想念と旺盛な創作欲が感じられる。

## 6. キリスト教と自然科学

17世紀後半から西洋諸国は大啓蒙時代に入った。キリスト教の権威と伝統に縛られてきた社会を合理的な知によって変革する運動が始まったのだ。

この運動が始まる前の16世紀前半に、カトリック教会の司教で科学者でもあったポーランドのコペルニクス(Nicolaus Copernicus, 1473-1543)が地動説を発表したことは画期的なことであった。当時、彼の地動説は強烈な反発を受けたが、コペルニクスの死後、1610年にイタリアの物理学者・天文学者として先進的な業績で知られるガリレオ(Galileo Galilei, 1564-1642)が地動説を支持し、英国の哲学者・神学者であるベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)とともに地動説を世界に広める努力をした。地動説はようやく世間に知られるようになり、啓蒙運動の推進力になった。なお、ガリレオは敬虔なカトリック教徒であったが、地動説を唱えたために、カトリック教会による宗教裁判にかけられたことがあると伝えられる。

地動説によって、地球は膨大な数の星から成る銀河に属する惑星の1つであることが明らかになった。一方、旧約聖書の「創世記」には「7日間で地球が創られ、6日目に人間が生まれた」と書かれている。なぜそのようなことが起きたのかは説明されていないし、説明する必要もない。神の無謬性は宗教の世界では大前提になっている。

現代の宇宙論では、ビッグバン(Big Bang)によって約138億年前に宇宙も地球も生まれたとされる。宇宙に存在するすべてのものが現在のような形をしているのは、宇宙の物理法則によってすべて成るべくして成ったと説明される。現代の物理生物学の泰斗コッホ(Christopher Koch)<sup>5</sup>の入門書では、ビッグバンは「すべてのものが極限、すなわち非常に小さな特異点まで圧縮された状態が、膨張して、宇宙も地球もできた」と説明されている。評者の理解を超えることであるが、これが定説になっているということは、世界の学者たちを納得させるだけの根拠を示すことができたということであろう。

さらに科学史における大発見とされるのが、英国の生物学者・地質学者として知られるダーウィン(Charles Darwin, 1809-1882)が『種の起源』(1859)で提唱した進化論であった。この理論は、現在

では補強されて、「何十億年という過去において、水中に発生した小さな生命体が進化とともに分化した結果、現在の人間になった」と説明される。ダーウィンは医師の父親の勧めに従って、聖職者になるために1827年にケンブリッジ大学のクライスト・カレッジに入学して神学や古典を学んでいる。一家は英国国教会の熱心な教徒であり、ダーウィン自身も例外ではなかった。しかし卒業後、動物と地質の調査員としてビーグル号に乗船して、世界を巡航したときに、さまざまな野生動物の変異型を観察したことが、自然淘汰による進化の研究の基盤になった。このことが彼の人生の方向性を決定づけたのである。進化論を説明する際に、国教徒のダーウィンは唯物論に立脚したことは当然のことであり、信仰心との矛盾を意味するものではない。

1996年10月、ローマ教皇パウロ2世は、「進化論は仮説以上のものであり、肉体の進化論は認めるが、人間の魂は神によって創造されたものだ」と述べたという比較的最近の報道がある。肉体の進化論を認めたことは、教皇も科学の成果を認めていることになる。なお、魂は肉体が減びると、神とともに永遠に生き続けるとされる。カトリック教の根幹を成す肉体と魂の二元論に言及したのであれば、それは決して目新しい見解ではない。二元論という考え方は非常に古く、西洋哲学の祖である古代ギリシャのプラトン(Platon, 紀元前 427-347)まで遡ることができる。これは世界の複数の宗教によって共有される基本的概念である。プラトンのこのような世界観は新約聖書に採り込まれた(These Platonic views were subsequently absorbed into the New Testament.)と先述のKoch (2012: 150)は記している。

情報工学の急速な発達とともに科学万能の時代になったが、それに反比例するかのように、世界の宗教が急速に衰退したわけではなかった。これは宗教と科学はその目的が根本的に異なるからである。もしこの世に道徳や愛情が全然ないとしたら、どのようなことになるだろうか。だから宗教や倫理の可能性を否定することはできないのである。

モンペリオン牧師は、説教壇からは神を信じて祈り続けることの必要性を強調するのが常であった。しかし、そうすればすべてが解決すると考えていたわけではなかった。夫人が後日アンナに語っているように、アンナの子供が発症したとき、非常に心配した牧師はケンブリッジ大学時代の友人を通して、大学の専門医に最新の治療法を問い合わせている。牧師は手っ取り早く実利を求めたのだった。やがて懇切な手書きの手紙とともに治療薬が届いた。アンナは牧師夫妻の厚意に感謝しながら専門医の指示に従ったが、子供の容体は徐々に悪化していった。

神への祈りと医学的治療はレヴェルの異なる問題である。モンペリオン牧師が治療薬を求めたのは当然のことである。創薬は疫病に打ち勝つための最大の科学的手段である。当時は黒死病の特効薬がなかったので、神の采配という説を覆すことができなかった。世に言う怪奇現象はすべて科学によって説明できるはずである。

科学万能という文明の時代を生きる私たちは、特定の宗教的行為や神事は別にして、「祈る」ということと全く無縁の生活をしているわけではない。私たちはスポーツの試合・受験・選挙などに臨む際に必勝祈願をすることがあるし、初詣で家族の安全や健康を祈ることもある。雨乞いをしたり「テルテル坊主」を吊るすこともある。私たちが不安心理にかられたとき、信仰とか心がけという心の問題が入りこむ余地がある。社会人として道徳とか倫理が求められることもある。「祈る」ことは、宗



派を超えた世界共通の精神的行為である。

「真理の追求」という言葉はよく使われる。しかし、自然科学における真理と、倫理・宗教・哲学・歴史・政治・経済・文学・言語学・教育・芸術などの幅広い分野の研究が主張する真理は本質的に異なる。例えば、「水はどのような元素でできているのか」という問いには正しい答えは1つしかない。主観によって変更される可能性はない。しかし、宗教の場合は、時代とともにいくつかの教派に分かれて、教典の解釈に違いが生じることがある。この場合、その宗教には複数の真理があったことになる。何が真理であるのか、何が正しいのかという観点からは、そのような宗教には普遍的あるいは絶対的な真理はないと言える。

生成文法の流れを汲む言語学者であることを自認するジャケンドフ (Ray Jackendoff, 2012: 247) は、近著の最終頁で「多様な研究を俯瞰的に見る方法」(“perspectival perspective”) に立てば、すべての研究に共通する真理はないと認識するべきである (Finally, from the perspectival perspective, it is important to recognize that there is no overarching, perspective-free Truth about The World.) と述べている。言語研究で自説を強く主張することは、必然的に他説を排除することになるが、このような熱意や信念は探求心の源泉となるものである。だが、多様な価値観が交錯する現代社会では、異なる研究方法や目的が併存することを認識し、それらと共生する努力をすることも必要である。世界の宗教や思想についても同じことが言える。

## 7. おわりに

現在では特に話題にされることもなく忘れ去られた「疫病の村」の人間模様を、現代に鮮やかに蘇らせたという点で、他に類例を見ない貴重な作品である。教区牧師の教えを縦の糸に、村人たちの素朴な実生活を横の糸にして織られた、悲しい散文の叙事詩である。教区牧師は宗教改革以前のローマ・カトリック教の時代から伝統的な権威によって村人たちの指導者として精神的支柱になり得たのである。「疫病の村」として歴史に名を残すことになったけれど、村の封鎖すなわち自己犠牲によって、近隣の町村がペスト禍に巻き込まれなかったことをせめてもの救いとしなければならないのだろうか。

黒死病は感染性が極めて強い疫病であることを牧師は充分に知っていた。しかし、この村では死者や発症者の家を閉鎖して出入りを禁止する措置は取られなかった。発症者やその家族をあからさまに忌避する場面もほとんど描かれていない。アンナの2人の子供が発症した時には、薬草研究家の女性は特製のお茶を飲ませたり、軟膏を塗って熱を冷まそうとした。牧師夫人はアンナの子供たちの病床に座り続けた。子供たちの葬儀が終わり数週間経つと、アンナは悲しみを乗り越えて夫人と一緒に他の患者や遺族を訪ねて励まし続けた。仮に家屋閉鎖という合理的な措置が提案されたとしても、運命共同体の村社会では到底受け入れられなかったことであろう。

大佐邸から解雇された2人の男性は、大佐の意見に従ったのかどうかは明らかにされていないが、遠く離れた村の親戚に身を寄せるために徒歩で旅に出た。ところが、その途中、沿道の人たち

から病原菌扱いされて疲れ果ててしまった。彼等は目的地に到達することなく、住み慣れた村へ戻ってきた。彼等は故郷の人々の温かさをこのとき初めて知ったのだった。

残留を決意した村人たちの様子は、「自分で選んだ広い緑の牢獄(the wide green prison of our own election -p.117)で暮らすことになった」と描写されている。しかし彼等が自ら選んだというよりは、牧師の“Stay here”という言葉に従わざるを得なかったのである。当時の状況を今振り返れば、不謹慎で不穏当な言い方になるが、この村は結果的には自然の中の「人体実験場」であったと見ることもできる。さらに見方を変えれば、牧師を座長にした「モンペリオン劇場」と呼ぶこともできるだろう。墓堀人が死亡して埋葬作業が停滞した際には、牧師が代役を演ずる一幕もあった。黒死病は約3分の2の村人を食い尽くし、約1年後、自然消滅した。素人の推測の域を出ないが、3分の1の村人には抗体とか免疫性が備わっていたので、ペスト菌はそれ以上浸食する対象がなくなってしまうのではないのだろうか。そうであるとしたら、個人的抗体や免疫性の保持の有無は何によって決まるのだろうか。

アンナが牧師の紹介で下宿させた旅の洋服仕立て職人は何者だったのか。玄関に立って礼儀正しく宿を乞う青年の小ざれいな身なりはアンナに好印象を与えた。アンナの家は子供たちの声で急に明るくなった。彼女はこの時ばかりは神に感謝した。しかしその後、全く予期せぬことであったが、あれは悪魔だったと噂する村人が現れた(Later, there were those who would say it had been the Devil.)。「悪魔は扉を叩いて入ってくる」という西洋の諺が示唆するように、下宿人の正体は善意の仮面を被って村人に甘くささやきかける悪魔の化身だったのだ。因襲に縛られ、草深い田舎で土俗に染まって暮らす一部の村人たちが、このような妄想に憑かれたのはごく自然なことであったと言えるだろう。

黒死病を題材にした小説としては、ノーベル文学賞受賞者カミュ (Albert Camus, 1913-1960) の『ペスト』(*La Peste*, 1947)<sup>6</sup>がよく知られている。第二次世界大戦直後、アルジェリアの第二の都市オランを舞台にして一見実録風に描かれているが、この頃この都市で黒死病は大流行していない。完全にフィクションである。大量のネズミが喀血死する現象が黒死病襲来の前兆として冒頭で描かれている。この小説は、もし大都市で黒死病が発生したら、人間の心はどのような状態に追い込まれるのか、人生観とか宗教や思想はどの程度まで苦境に耐えられるのかということを追求している。心の中の問題であるから、その答えは抽象的になる。一方、ブルックスのこの作品では、そのような抽象的思考が求められる部分は比較的少ない。現実的な課題を追求しており、新しい時代へのかすかな息吹きを感じられる。偏狭な因襲の世界と近代的な知の世界を巧みに交錯させながら、当時の村人の生活や思考形態を多面的に描いた現代的な作品である。

黒死病という俗称で知られペスト菌が初めて発見されたのは、北里柴三郎(1853-1931, 熊本県出身、ドイツ人コッホの門下生)とイエールサン(Alexandre Yersin, 1863-1943, スイス生まれだが、フランス国籍取得。フランスのパスツール研究所に所属)が国際調査団員として、ペストが流行していた中国の広州と香港へ派遣された1894年のことであった。彼等は香港でそれぞれ別の班で調査していたがほぼ同時期にペスト菌を発見し、その後の本格的な研究への道を拓いた。抗生物質が開発されたのは、1940年代に入ってからである。日本では19世紀から20世紀にかけて流行したが、

1926年(大正15年—昭和元年)から現在まで発症例は報告されていない。

最後に、高山真由美氏の邦訳『灰色の季節をこえて』を何度か参照させていただいたことを感謝と敬意の念とともに記したい。原作の美しい格調高い文体は、そのまま流麗で読みやすい邦文に超訳されている。気づいたことを2つだけ述べたい。

邦題の『灰色の季節をこえて』(2012)は、原作の“Grey is the sky colour here.”(p. 65)という秋の空の描写から採ったと思われる。灰色の雲が低く垂れこめるこの村の秋の空は、長い冬の到来と村人たちがやがて直面することになるペスト禍を象徴しているかのようである。このタイトルを選んだ訳者の気持ちはよく理解できる。少し世俗的な評言になるが、読者が瞬時に内容を推測できる邦題にする方が何かにつけて得策であると思う。

次は語法と文法の観点からの私見である。第4章で触れたように、疫病の犠牲者が増すにつれて、悪魔が騒ぎ出しその声は母親の耳にも達した。アンナが母親を訪れると、子供を両手で高く持ち上げ、したたり落ちる尿を鍋で受けているところだった。As if the poor infant had not been enough imposed upon, Lottie Mowbray was holding the baby aloft and steering the thin stream of his piss into a cooking pot that had evidently just been lifted off the fire. (p. 213. underline mine)において、下線部訳は「かわいそうな子供はまだ負担をかけてはいられないように」(p. 288)となっているが、評者は「子供をどれだけかわいそうな目にあわせれば気が済むのかというように」と解したい。The poor infantのpoorは、形式的には形容詞であるが、意味的には述部を形容しているからである。例えば、My poor child died yesterday.のpoorは話者の心的態度を表すので、「かわいそうなことに私の子供は昨日死亡した」と解釈される。なお、念のため敢えて付言するが、“not ... enough”は“cannot ... too much”の別形ではないのだろうか。

## 補注

- <sup>1</sup> 1955年にシドニーに生まれた。シドニー大学を卒えてから地元紙の記者をしたが、その後コロンビア大学大学院でジャーナリズムを専攻した。Wall Street Journal紙の特派員として11年間中東地区を担当した。その経験に基づいて書かれたのがNine Parts of Desire: The Hidden World of Islamic Women(1994)というノンフィクションである。本稿の対象作品は小説の第1作である。第2作March(2006)はオルコット(Louisa May Alcott)のLittle Womenに想を得た米国の南北戦争時代のマーチ家の年代記である。小説部門でピューリッツア賞を受けている。第3作はPeople of the Book(2008)、第4作はCaleb's Crossing(2011)、最新作にThe Street Chord(2015)がある。1作から4作までは邦訳が出ている。
- <sup>2</sup> 私家版であるこの論文集は入手が困難なので、残念ながら未読である。今後、入手の可能性を探りたい。
- <sup>3</sup> 神に贖罪の意を示す苦行者行進は、1260年にイタリアのベルージャに最初に現れた。1261年ローマ教皇が神意に反するという理由で禁止令を出したので終息したが、1348年8月黒死病がイタリアのヴェネチアで大流行した際に復活し各地へ広がった。100人前後で行列をなして徒歩で移動し、教会や聖堂に着くと円陣を作り、靴と上着を脱いで地面にひれ伏して謝罪する。まず団長が団員を鞭打つ。次に団員が許しを乞いながら自分に

鞭打つ。鞭の先に3本の皮ひもと金属製の棘が取り付けられていたので、団員たちは血だらけになった。移動の途中でユダヤ人を襲撃するなど問題行動もあった。「疫病は神が与えた罰であり、罹患するのは不信仰のせいである」と妄信した人たちが起こした愚行であった(島崎 2020: 25-27)。

- <sup>4</sup> 聖バルトロマイはキリストの12使徒の1人である。伝承によれば、インド・ペルシャ・アルメリアで宣教したが、アルメリアで惨殺された。殉教した8月24日は祝祭日になっており、聖人として現在も崇められている。
- <sup>5</sup> カリフォルニア工科大学教授。1956年ドイツに生まれた。両親とも敬虔なカトリック教徒だったので、本人もそのような家庭教育を受けた。結婚して子供ができてからも、子供を同じ信仰の下で育て洗礼を受けさせた。しかしながら、後年になって棄教した。彼が敬愛してやまない同僚で年長のクリック(Francis Crick)は、遺伝子の本体であるDNAの二重らせんを発見して1962年にノーベル賞を受けた著名な物理化学者であった。この学者から受けた研究上の影響は非常に大きかった。だが、キリスト教に強い嫌悪感をもっていたことがゴッホに影響を与えたように思われる。コッホは「聖書は詩的に書かれており、人間が永遠に背負いこんださまざまな問題について深く考えさせ、人間の本质にハッと気づかせてくれることがある。それは長年にわたって人々を導いてきた倫理の書である」と評価している。だが、「教義そのものは納得できない。宗教上と研究上の立場を使い分けるなんてことは不快である。私は神の啓示を受けたことはない。信じられるのは科学的に説明できることだけだ。世界をありのままに見るべきであって、自分が望むように見てはいけない(... we must learn to see the world as it is and not as we want it to be. -p. 152)」と自著で語っている。
- <sup>6</sup> この小説の終結部で、街から黒死病が去ったことを市民たちが歓声を上げて喜び合う場面がある。この光景を目の当たりにした開業医リウーは冷静だった。この喜悦の中に疫病の影を見ることができた。彼はこの歓喜する群衆の知らないことを知っていたのだ。彼は次のように独白する——ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反故(ほご)のなかに、しんぼう強く待ち続けていて、そしておそらくいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを呼びまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということを。(宮崎 訳『ペスト』p. 458)

この小説はここで閉じられる。字義通りには、ペスト菌は死滅せずに私たちの周辺に潜んで次の出番を待っているという意味であり、それが潜んでいる場所は子供に説明するかのように具体的に明示されている。しかしこの具体的表現は譬え話であり、その真意は話者の心の中にある。現在の繁栄や僥倖に酔いしれる民衆は、過去の悲劇や失敗から得られた教訓を忘れてしまう。栄華も平和も幸せも永くは続かない。大衆文化も愚衆政治も、このような民衆がいるからこそ成立するのであり、厄災は必ず繰り返されるのである。

## 書評対象作品

Geraldine Brooks, *Year of Wonders*. 2008. xv+304pp. Harper Prenal: London, New York, Toronto, Sydney and New Delhi.

(Fourth Estate 社によって2001年に版權が得られ、2002年に初版が出ているが、それは入手困難だったので、本稿では上掲のように2008年にリプリントされたHarper Prenal 社版を用いた)。

## 参考文献

- 平井正徳(訳)(2009)『ペスト』中公文庫. [Daniel Defoe, *A Journal of the Plague Year*. 1722]
- 石 弘之(2012)『感染症の歴史』角川文庫.
- Jackendoff, Ray(2012) *A User's Guide to Thought and Meaning*. Oxford University Press.
- Koch, Christof(2012) *Consciousness: Confessions of a Romantic Reductionist*. MIT Press.
- 小泉 徹(1996)『宗教改革とその時代』山川出版社.
- 宮崎嶺雄(訳)(1969)『ペスト』新潮文庫. [Albert Camus, *La Peste*. 1947].
- 磯田道史(2020)『感染症の日本史』文春新書.
- 押谷 仁・瀬名秀明(2009)『パンデミックとたたかう』岩波新書.
- Paul, David(2012) *Eyam: Plague Village*. Amberley Publishing.
- 佐々木昭夫(訳)(2007)『疫病と世界史』(上)(下)中公文庫. [William H. McNeil, *Plagues and Peoples*. 1976. Anchor Press / Doubleday]
- 島崎 晋(2020)『人類は「パンデミック」をどう生き延びて来たか』青春出版社.
- 高山真由美(訳)(2012)『灰色の季節をこえて』武田ランダムハウスジャパン.